

# 椿つらつら話

つくば市 坂上 博

(俳号・麻呂)

霊力の宿る聖なる木の椿は、別名艶葉木ともいわれるように長寿の象徴として花とともに青々とした葉も愛でる吉祥木である。

この聖なる椿は、古くは万葉集にも詠まれている「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思ばな巨勢の春野を」。歌の背景は、大宝元年（七〇一年）九月持統大上天皇の病氣療養の為、紀州白浜に湯治に向かう道中、従者の坂門人足が巨勢寺で持統大上天皇の健康と長寿を願い、聖なる巨勢山の椿に呼びかけて詠んだと伝わる。翌年、持統大上天皇は病を押して、かつて壬申の乱のおり夫の大海人皇子（天武天皇）に協力し勝利に貢献してくれた三河物部氏などの地方豪族への御礼の行幸をし、その年の暮れ十二月二十二日、藤原京にて五十八年の生涯を閉じた。

上古の時代、椿は日本の原野に広く自生しており、朝廷では長寿の霊木として正月卯の日に行われる厄払いの「卯の杖」（正倉院蔵）として用いられた。また花色は白が特に珍重され宮人は競って山に分け入り天皇に献上したと伝わる。

椿の原産地日本には江戸の昔から京椿、江戸椿、尾張椿、肥後椿の四大ブランドがある。椿は平和の象徴とも言われ、一六一五年大阪夏の陣が終わると太平の世が到来、日本中に園芸ブームが興りその代表的なものが椿であった。徳川二代将軍秀忠は大のつく椿マニアであり娘婿の後水之尾天皇とともに、長男の家光、弟の尾張徳川家初代義直などに影響を与え、公家、大名、大大名の家老等の支配階級を中心に興ったのが寛永の第一次椿ブームである。現存する江戸図屏風には江戸城吹上の御花畠に諸侯から献上された珍しい椿花の咲き誇る様が描

かれている。元禄時代にも第二次椿ブームが興り庶民の楽しみとして華ひらくが、残念ながら贅沢品として御禁制の花となってしまった。

「椿は花が首から落ちる縁起の悪い木である」と言い伝えられているが、その気持ちは満更解らなくもない気がする。

椿四大ブランド尾張椿の中から代表的なものをひとつ紹介させていただくと、名古屋城本丸御殿南庭前に八重大輪で純白に咲く『御殿椿』がある。昭和二十年五月の空襲で天守閣、本丸御殿とともに灰燼に帰すが、翌年焼け残った根から新たに発芽し現在は樹高六メートル程の箒状の樹形に蘇っている。本丸御殿は一部が完成し公開されているが、上洛殿が未だ工事中である為、御殿椿はまだ観ることができない。ただし原木から株分けされた椿が天守不明門脇に植栽されているのでぜひご覧いただきたい。



俱利伽羅峠の大椿

椿は昔から生活用品として重宝され、また木質が硬いため、うばめかし同様に炭木としても利用されて、樹齢が数百年と長いにもかかわらず伐採を繰り返され、奥山や神社仏閣などの人の手の及ばぬところ

で生き長らえている。

昨年友人の誘いで、神社址に残る俱利伽羅峠の大椿を訪ねる旅に出かけた。ようやく辿り着いたら背丈程の笹が一面に茂っており入口の目印はまさに二つの看板だけだった。「熊注意」「マムシ注意」……。ここまで来て引き返すわけにもいかず、エイヤとばかりに藪に分け入った。二十分程の山道を登りきると樹齢五百年の大椿が鎮座、まさに藪の中の『大藪椿』であった。



大椿目印は熊注意札

麻呂 (俳句誌「笠寺」2016年6月号掲載)